

# 小田原市スポーツ推進審議会

## 平成27年度第2回審議会概要

日 時：平成28年3月7日（月）14時30分から16時まで

場 所：小田原市生涯学習センターけやき 4階 第2会議室

出席者：【委員】

江島会長、鈴木副会長、岡部委員、長峯委員、加藤委員、山本委員、釘持委員、遠藤委員、宇佐美委員、川向委員、佐藤委員、都丸委員

以上12名

※欠席委員：掛原委員、今井委員、小宮委員

以上3名

【小田原市】

杉崎文化部副部長、川口スポーツ課長、嵯峨スポーツ振興係長、鈴木主任、岩澤主事

以上5名

司 会 本日は公私ともに御多忙のところ、平成27年度第2回小田原市スポーツ推進審議会に御出席いただき、誠にありがとうございます。

まず、本審議会は「小田原市スポーツ推進審議会条例」に基づき、委員定数の2分の1以上の御出席をいただきましたので、会議が成立することを御報告申し上げます。なお、この審議会は、「小田原市情報公開条例」に基づき、公開することとなっております。したがって、市民の方が傍聴されておりますので、御承知ください。また、議事録等のため、この会議を録音しますので併せて御承知ください。

それでは、開会に先立ちまして、文化部副部長の杉崎から開会にあたりまして、御挨拶を申し上げます。

### 1 主催者挨拶

杉崎文化部副部長が挨拶を行った。

### 2 委員自己紹介・職員紹介

各委員による自己紹介を行った。

司会から、出席職員の紹介を行った。

司 会 それでは、議事に移りたいと思いますが、進行は会長にお願いいたします。江島会長、よろしくをお願いいたします。

### 3 報告

#### 小田原市民スポーツアンケートの結果について

江島会長 それでは次第に基づきまして進行させていただきます。

報告 小田原市民スポーツアンケートの結果について、事務局から説明をお願いします。

嵯峨係長 小田原市民スポーツアンケートの結果について、資料1から説明いたします。

(1) 調査の目的、(2) アンケート実施要領ですが、こちらは前回の審議会で示したとおりとなります。調査の目的について、スポーツ基本計画において、スポーツ実施率は65%程度を目標とされておりますので修正をお願いします。

スポーツの実施状況等を把握し、市民ニーズを捉えることにより、今後の本市における生涯スポーツ振興を図ることが目的となります。

(2) アンケート実施要領について、満20歳以上男女1,000人ずつを対象に地区を平均して世代別に抽出して行いました。調査項目については、前回の審議会で御審議いただき、提案いただいた内容で行いました。

(3) の調査結果ですが、2,000通発送し、その34%にあたる679件回収しまして、男女比率はほぼ同じで、世代が上がるにつれ、回答率も上がるかたちとなりました。

続きまして、8つの調査項目ごとの結果について説明いたします。

現状の運動・スポーツの実施状況について、まず定期的に行っている運動・スポーツについては、ゆるやかなスポーツ・野外でのスポーツ・競技的スポーツを前回アンケートと同じ区分けで取りました。ウォーキングが25%、体操が12%で、比較的気軽に実施できるものが多い結果となりました。

世代別についても集計をし、円グラフで表しました。ウォーキングについては、50代が28%、60代以上が38%と年配の方の実施が多いことが読み取れます。本市における週に1日以上の実施率は44.3%となり、前回の43.7%を0.6ポイント微増する結果となりました。国・県と比較すると、前回と同様に国の調査結果は下回り、県の調査結果は上回る結果となりました。また、世代別のスポーツ実施率を出したところ、60代以上の実施率は55.6%と高く、50代では49.7%で本市の平均をやや上回り、40代は39.4%と平均を下回る結果となりました。

次に運動・スポーツを実施した理由を伺ったところ、「健康・体力づくりのため」、次いで「楽しみ、気晴らしとして」となっており、前回同様の結果となりました。スポーツを競技的なものではなく、健康の保持・増進のために実施している方が多い結果となりました。また、「健康・体力づくりのため」と「楽しみ、気晴らしとして」を世代別にみると50代、60代以上が多くなっています。また、スポーツ活動について、「行いたいと思っはいるが、できない」という回答が56%

と、54%だった前回調査同様、高い割合の結果となりました。運動をしていない理由については、今後、基本指針の見直しを行う上でも、できない理由を把握することが大事ですが、一番多い理由は「仕事（家事・育児含む）が忙しい」で、次いで「機会がなかったから」となっております。なお、年代別に分析すると、「仕事（家事・育児含む）が忙しい」については、各世代のうち、20代・60代以上の男性を除いては、一番の理由となっております。

運動・スポーツについて、「十分に行っており、現状で満足している」の回答の割合は全体で10%となり、「行っているが、もっと行いたい」という方は27%と、十分に行えない方が多い中でも、90%を超える方がスポーツに関心がある結果が出ています。

今後、行いたい（行ってみたい）運動については、競技的スポーツでは「テニス等」が34%と高い数値を示し、ゆるやかなスポーツでは「ウォーキング」や「体操」が、野外でのスポーツでは「サイクリング等」や「ハイキング等」が高い結果となりました。

なお、性別・年代別で分析すると、ゆるやかなスポーツのうち「ウォーキング」は50代・60代以上の割合が高く、他の年代でも幅広くウォーキングの意向がある結果となりました。「体操」は女性の割合が高い結果となりました。野外でのスポーツでは「ハイキング等」がどちらかという高齢の方、「サイクリング等」はどちらかという若い方が多い結果となりました。

また、運動・スポーツしている時間及び時間帯の調査も行い、集計しました。

続きまして、スポーツクラブ・同好会について、加入しているスポーツクラブや同好会については、「加入していない」が非常に多く、次いで「愛好者のクラブや同好会」、「民間のスポーツクラブ」という結果となっております。

また、加入していない理由について、「仕事や生活が忙しい」が最も多く、次いで「面倒くさい」という結果となりました。

また、地区ごとにスポーツクラブ・同好会の活動情報を集約して、小田原市体育協会のホームページで公開していることについては、「知らない」が最も多く、次いで「知っているが活用はしていない」という結果になりました。

続きまして、小田原市のスポーツ振興について、スポーツ振興に期待する効果については、「健康・体力づくり」が最も高く、次いで「スポーツ施設の有効利用」、「余暇時間の有効活用」となっており、前回調査と同様の傾向となりました。

スポーツ振興を図るために、今後取り組むべきこととしては、「手軽にスポーツができる公園整備」が最も高く、次いで「年齢層にあったスポーツの開発普及」等となっております。

続きまして、地域スポーツについてという項目については、今回、新たなテーマとして調査したいと考え、項目設定を行いました。

「小田原市スポーツ推進委員」やその活動については、「知らない」が77%と最も多く、次いで「名前を聞いたことがある程度」が18%という結果となって

います。

御自分の地区の「体育協会」・「体育振興会」やその活動については、「知らない」が54%と最も多く、次いで「名前を聞いたことがある程度」が26%という結果となっています。結果、「体育協会」・「体育振興会」の方が「スポーツ推進委員」よりも知名度があるとの結果になりました。

また、過去1年間に地域のスポーツ活動を行ったかどうかについては、「参加していない」が72%で最も多く、次いで「健民祭（地区の運動会）に参加した」が18%と参加した中では一番多い結果となりました。

地域のスポーツ活動に参加したきっかけについては、「役員の人や周囲の人に頼まれたから」が最も多く、次いで「家族・友人等に誘われたから」、「持ち回りで順番がきたから」という結果になりました。

参加した立場については、「選手として」参加したが最も多く、次いで「応援・観戦」、「役員・運営補助として」参加という結果となりました。

なお、「健民祭（地区の運動会）に参加した」に限って、参加者を年代別に集計すると、20代を除いては比較的バランスよく各世代に分かれて分布しています。

続きまして、スポーツボランティアについては、「参加したいとは思わない」が最も多く、次いで「興味はある」、「内容によっては参加したい」という結果となりました。年代別で集計すると、20代を中心に若い方の参加傾向が比較的伺える結果となっています。

続きまして、小田原市のスポーツ施設について、本市のスポーツ施設については、「施設の数も整備内容も不十分」という意見が多く、次いで「施設の数も整備内容も十分」、「施設の数が少ないが、整備内容が十分」となりました。なお、市内のスポーツ施設の利用頻度については、「利用したことはない」が最も多く、次いで「数年に1回程度」、「半年に数回程度」となっており、前回と同じ傾向となりました。

続きまして、総合型地域スポーツクラブについては、まだまだ「知らない」が多い中、「是非加入したい」、「条件次第で加入したい」という方も多く、関心の高さが伺えます。「条件次第で加入したい」方については、各世代で分布していることが分かりました。

続きまして、スポーツ観戦について、「みるスポーツ」の問いを設定しました。過去1年間に競技場やグラウンドなどで、直接試合を観戦した種目、又はテレビ等で観戦したスポーツ種目について及び、今後、競技場やグラウンドなどで、直接試合を観戦してみたいスポーツ種目について、集計をしました。

以上で報告 小田原市民スポーツアンケートの結果について、事務局からの説明を終わります。

江島会長 このアンケートの結果について疑問や意見、感想がありましたらお願いします。

遠藤委員 ウォーキングは歩け歩け運動と散歩などを含むとあるが、それだけなのか。

嵯峨係長 設問ではそのとおりです。

遠藤委員 ウォーキングに関しては聞き方によっては回答が増えるのではないかと。特に出勤や買い物等の生活習慣も含めるようにすればもう少し増えたのではないかと。意識を少し変える意味でのこういう調査も必要であると思うので、ウォーキングに関しては、もう少し幅を持たせてもよいのではないかと。市民もウォーキングぐらいならしているのではないかと。

山本委員 アンケート回答総数679件の勤務地は分析できるのか。時間がなくて運動・スポーツを行いたいと思っはいるが、勤務地が理由でできない可能性もあるのではないかと。

嵯峨係長 勤務地は調査していないが居住地は調査しました。

都丸委員 過去1年間に地域のスポーツ活動を行ったことがあるかの問いについて、複数回答か。

嵯峨係長 当てはまるものをすべて選択していただく複数回答です。

鈴木副会長 アンケート回収率34%とのことであるが、回収率は別として、地域で行われている調査と変わらない状況である。たとえアンケート回収率が60%になったとしても結果が逆転するわけではないので、やるべきことが見えている。

生活習慣の中に取り入れつつあるだろうが、「スポーツ」と考えると回答が変わってくると思う。「動かそう、あなたの体、スポーツで」とあるが、スポーツを柔らかに捉えないと、自分の健康のためには、日常生活の中に運動として捉えている方もいると思う。忙しいからやらないのは自分自身が健康であるからである。不健康であつたらやらないといけないと思う。忙しいと言っているのは働いているので活動状態は病気ではないという前提である。忙しいからやらないのではなく、どうしたらできるのかを探すことを求めないといけない。青年層や子育て世代の方も忙しい中で優先順位をどうするか。柔らかいスポーツ感をつくっていかなければならない。

川向委員 地域におけるスポーツ活動を参加したきっかけについて、「役員の人や周囲の人に頼まれたから」や「家族・友人等に誘われたから」など自発性がない。人が強制してやらざるを得ないような状況が本音だと思う。小田原市としてスポーツ活動が市民に根付くためには、どうしたら自発的にできるか、日常生活の階段昇り

降りだけでも、これぐらい健康になるといったようにアプローチを市としてもスポーツ振興を考えた方がよい。

加藤委員 健民祭で組長が選手集めや運営、あるいは選手として参加するが、これもひとつのきっかけでよいと思う。

アンケートでは体育協会・体育振興会、スポーツ推進委員の知名度が低い結果となったが、上府中地区のスポーツ推進委員をはじめ、上府中地区は参加型の運動・スポーツをするきっかけづくりに努めている。

鈴木副会長 特定の方だけではなく、一般の方も巻き込んでいかななくてはならない。

川向委員 きっかけづくりが大切で、スポーツに関与している方達が少しでも多くの方達に呼びかけていくことが大切である。運動嫌いをどうやって好きにさせるかが最大の課題であり、スポーツを好きな方は放っておいてもやる。「スポーツ」という言葉が持っているイメージを柔らかくしなければならない。簡単なエクササイズもスポーツであるといったアプローチを市民の視点に立って普及・振興していくことがキーワードではないか。

加藤委員 小さいうちに経験をさせた方がよい。小学生と中学生の体力が落ちているので、主に小学生・中学生を対象に上府中地区では3年前からロードレース大会を開催している。

昔のラジオ体操は夏休みの20日間ぐらい行ったのに、今は3日間ぐらいしかやらない。健民祭ではラジオ体操やおだわら百彩を取り入れているがなかなか定着しない。

小学生まではいろんなスポーツを行い、一番好きなスポーツを中学生ぐらいで決めていけばよいのではないか。小さいうちに経験させないと底辺が育たない。

遠藤委員 運動をしていない方は実際に誰一人としていない。皆何かしら動いている。運動量が少ないので健康を保つためにはどれくらい運動をするかといった、一日の中でどれくらい運動量があるか、歩くだけでもよいので年代別の活動量を示さないと、自分自身で歩こうということにならない。

市民を運動に向かわせるには、ウォーキングぐらいしかないのではないか。

江島会長 スポーツアンケートとあるが、「スポーツ」の概念、捉え方が皆違う。種目別のスポーツと捉える方もいれば、日常生活の運動を捉える方もいる。

結果的に小田原市は何をしていけばよいのか。スポーツアンケートの結果に基づいて小田原市スポーツ振興基本指針を改訂していくので、この「スポーツ」の捉え方を皆様と議論していきたい。

小田原市はもっとスポーツを柔らかくしていこうとなれば、「スポーツ」という言葉ではなく、他の言葉を使ってもよいかもしれない。

都丸委員 県の調査結果も小田原市とほぼ同様の結果を得た。前回も同じような結果が出た中で、施設が足りないとの回答が多かった。施設を増やしていくことは困難なので、平成12年からスタートした3033運動をもう一度復活させて、どこでもできるような活動として1日30分週3回3か月間実施するというものをもう一度あらためて打ち出した。その中でスキマストレッチという、職場でも始業時・昼休み・終業時に少しストレッチができるようなCDを出して実施している。また、階段に標語のステッカーを貼り、実施をしているところではあるが、今年度の調査では実施率が上がらなかった。

県ではラジオ体操の推進、各市町村に依頼し、総合型地域スポーツクラブのちらしを小学校に配付等の取り組みを行っていく。

県でもできない世代にどうするか、未就学児にどのようにアプローチしていくのかを考えている。年代別で多様な考え方がるので、年代別に組みんでいかなければならないと考えている。

川向委員 コミュニティの欠如をこのアンケートから感じた。小田原市のコミュニティはどんな感じか。スポーツ活動を行う上で、個々のヒューマンアクティビティ、通勤するときの活動もスポーツと捉えることも一つの方法であり、また、サッカー等のスポーツアクティビティのスポーツのアプローチがあるが、小田原市が定めていくときに人間の活動からとするのか。

幼稚園の子ども達は遊びで体を鍛えていく。神経系が一番発達する時期である。どうやって幼児が庭や地域で遊んでいるのか、動くことの喜び、遊びから技の細かいところに喜びを感じて技術の高いスポーツに発展していくのではないか。

小田原市が求めているスポーツアクティビティは何を指すのかの部分がある程度、例えば、スポーツ活動だけではなく、子どもの遊びを推奨していくとすれば、そのために遊びの空間、活動、遊び場や共通のイメージを持ったリーダーの養成を同時にしていくなどが考えられる。

都丸委員 運動しない方について、県ではランドマークタワーでのウォーキングのイベントを開催した。ランドマークタワー69階の階段登りを実施したところ、申込が非常に多く、中でも参加した方々は子ども連れの家族が多かった。運動していない方が多く参加され、そのことについて検証すると、ランドマークタワーというスポットで登ったことがない階段を登れることが特典のようなかたちで参加されたようである。

小田原市の様々なスポット、有名なスポットがあれば、それを使うと運動していない方もきっかけづくりになるのではないか。

江島会長 スポーツも様々なものがあり、様々な段階があり、様々なものがあるのでどう捉えていくか。例えば、風呂上りに5分間ストレッチをしても運動になる。時間や種目にとらわれるのではなくて、何を小田原市はスポーツとして捉えていくかが大事になる。

高齢者と幼児では運動の質が違うのでそれをどう捉えるか。基本指針でどう踏み込んでいくのか。

鈴木副会長 地域コミュニティの活性化をしていく中で3033運動について、県の運動は少し時代が早かったのか、浸透しなかった。中抜きをせず、もう少し続けていく必要がある。

昔はラジオ体操を1か月間ぐらい行っていた。また、子どもとお年寄りでは内容が違うのは確かにあり、朝起きてそこに行くことが生活習慣となり、運動するということにつながっていくので、ラジオ体操だけの評価ではない。夏休みの期間に子どもたちの生活習慣をつくる。ラジオ体操には、体操の運動量以前にラジオ体操に付帯している良さがたくさんある。そこを見直すことがヒントになるかもしれない。

川向委員 小田原市はお祭りがあるのか。お祭りの参加者の活動は活発である。盆踊りや民謡に参加している方達はいきいきしている。これも身体活動でスポーツ活動である。スポーツは遊びと捉えているので、競技スポーツは遊びの最上級と思っている。遊び心で磨いていけばよい。盆踊りなど、地域で根付いているものをどうスポーツ振興に結び付けていくかもおもしろいのではないか。

鈴木副会長 参考になるが横浜市は18区あり、18の唄と盆踊りがある。小田原市も26地区あるので、地域の特徴を入れたものを作り、盆踊りの際に全地区をやってもらうのはどうか。横浜市ではまだ全部がまとまってまではやっていない。小田原市でも伝統化していくのはどうか。

佐藤委員 小田原小唄は各地区でもやっていると思う。

江島会長 地区の夏の盆踊り大会で小田原小唄が出てくるのではないか。

加藤委員 健民祭でも昼休みに盆踊りをやっていた。

鈴木副会長 小田原市のスポーツ課は文化部なので、スポーツと伝統文化をジョイントしてみてもどうか。



杉崎副部長 片浦地区では学校や自治会が、地区の伝統芸能の鹿島踊りをお祭りに参加して踊っており、コミュニティの中で伝統文化もスポーツも継承・継続する術を皆で考えている。

スポーツを地区単位で行う団体は26地区すべてにあり、伝統的な行事を行うなど、協力して集まるという体制はできている。コミュニティをそれぞれの組織に広げていくのは一つの手法だと考えている。

江島会長 小田原市もお祭りが多いが、神輿の担ぎ手が少なく、他の地区から応援してもらうこともあるので、現実是非常に厳しい。

議題の小田原市スポーツ振興基本指針の見直しについて、事務局から説明をお願いします。

#### 4 議題

##### 小田原市スポーツ振興基本指針の見直しについて

嵯峨係長 小田原市スポーツ振興基本指針の見直しについて、現行の基本指針を現況に沿ったものに修正を行っていく中で、今回の小田原市民スポーツアンケートの結果を現行の基本指針の本文に落とし込むと、どの部分を変更していくか、現行の基本指針本文をベースに説明します。

2現況と課題の2-1スポーツ環境の変化について、ウォーキングや体操、ストレッチ等、気軽に実施できる割合が多くとありますが、ほぼ前回と同じなので、変更はございません。

2-2本市におけるスポーツの実施状況について、スポーツ実施率は前回43.7%から今回44.3%と0.6ポイントと僅かに上昇し、ほぼ横ばいとなっています。スポーツ非実施率は前回37.8%から今回39.0%と1.2ポイント上昇しました。この結果を基本指針に反映させてまいります。なお、スポーツ実施率は、国の調査結果を下回り、県の調査結果を上回り位置付けは変わらないので、こちらの文章表記は変更する必要はないと考えています。

2-3既存の組織・団体と総合型地域スポーツクラブについて、表記が古いものがあり、体育指導委員がスポーツ推進委員になったこと、富士見体育振興会が新たにできたこと、地区が25地区から26地区に増加したことと若干変化があります。総合型地域スポーツクラブについては現在も2クラブなので変更はありません。アンケート結果では、小田原市スポーツ推進委員、体育協会・体育振興会、総合型地域スポーツクラブを「知らない」割合が高く、前回よりも組織としては継続的に活動してはいますが、市民への周知や浸透が不十分であることから反映させてまいります。

2-4子どもたちの体力向上、スポーツ活動の機会創出について、近年の子どもたちの体力向上が全国的に課題となっているので、課題としての位置付けは前

回と変わりありません。

2-5 スポーツ指導者の充実について、運動を行わなかった理由で「仕事（家事・育児含む）が忙しいから」が多い結果から、身近で気軽に楽しめる内容が求められている一方で、「指導者がいないから」は1%と運動を行わなかった理由ではありません。したがって「近年ではスポーツへの市民ニーズが競技を中心とした内容から、身近で気軽に楽しめる内容へと広がりを見せています」の変更はありません。指導者ではなくて、柔軟なスポーツが求められています。

また、小田原市のスポーツ振興を図るために今後取り組みをすべきこととして、「スポーツ指導者の養成」は、4.3%と低い結果となっています。

2-6 効果的なスポーツ情報の提供・発信について、前回のアンケート結果を受けて、市体育協会のホームページでクラブ・同好会の活動情報を公開したのですが、このことを知らないが74.9%なので周知がさらに必要となります。また、小田原市スポーツ推進委員、体育協会・体育振興会、総合型地域スポーツクラブを「知らない」割合が高いため、スポーツに関する情報提供・発信を入れていきます。

2-7 スポーツ環境の整備・充実について、小田原市のスポーツ施設の最多回答は前回と同じで「施設の数も整備内容も不十分」である一方、「施設の数も整備内容も十分」ですが、現行指針の構成を変える必要はないと考えております。

目標1「関係機関が新たな連携を図り、一体となった取り組みを展開し、一層のスポーツ振興を図ることにより、生涯スポーツ社会の実現を目指します。」については、連携を図る仕組み作りに順次取り組んでいるところですが、周知の不足等により、スポーツ関係団体・機関がそもそも市民に知られていないことがことアンケート結果から見受けられましたので、現行の目標1に「広報」というキーワードを加えていくことが必要かと思われます。

目標2「子どもたちのスポーツ活動を推進し、屋外・野外で元気に体を動かせる機会を増やします。」については、先ほど示したデータでも小田原の子どもの体力はまだまだであると思われることから、引き続き目標として掲げるべきだとは思いますが、今後の打開策へのきっかけとして、身近な地域で子どもたちのスポーツ活動を推進することが必要であると考えられます。したがって、現行の目標2に「地域で」というキーワードを加えてはいかがかと考えます。

目標3「数値目標として、スポーツを全くしない人を15%減少させるとともに、成人週1回以上のスポーツ実施率を60%にします。」についてですが、スポーツ実施率の数値は横ばいと未達成となっています。気軽にスポーツをしたいとありますが、実際は気軽にできないので、スポーツ実施率が上がらない現状となっています。今回のアンケート結果で新しく設定した項目からも、「忙しいから」、「時間がないから」という心情がうかがい知れます。

今後はこういった結果も踏まえ、生活とスポーツの一体化について、考えていく必要があると思われます。

次回以降の基本指針の見直しについて審議いただく中で、アンケートの結果を機械的に落とし込むと、どこが言葉足らずで、どこが今までのところと変わらないのかについて、説明させていただきました。

以上で議題 小田原市スポーツ振興基本指針の見直しについての説明を終わります。

江島会長 小田原市スポーツ振興基本指針の見直しについて、皆様から質疑がありましたらお願いします。

山本委員 2-3の既存の組織・団体と総合型地域スポーツクラブについて、競技団体数についてどうか。

嵯峨係長 これは基本指針策定当時の団体数なので、見直し時点の団体を反映させていきます。

鈴木副会長 地区体育団体とあるが、体育振興会や体育協会とあるが、地区で名前を付けるのか。スポーツ振興法からスポーツ基本法になった際、体育指導委員がスポーツ推進委員になった。スポーツ振興法の時代は「体育振興」という言葉であったが、名称変更も考えた方がよいのではないか。本来、「体育」は教えないと体育にならない。体育指導委員は教えるのではなく、地域のスポーツ振興をしていこうとスポーツ基本法で「スポーツ推進」に変わっていった。

杉崎副部長 もともと法律に基づく団体ではない。歴史が古く、個々の地区でそれぞれ自治会と並列のようなかたちでできたものである。名前の付け方も独自性を持っているので、統一されたものではない。したがって、行政側から名前を強制できない。

鈴木副会長 藤沢市もすべて体育振興会である。伝統的に使われていると思われる。伝統に縛られて既成概念が頭の中に刷り込みになっていくので、少し考えてもよいかもしれない。

法律や社会が変化している中、旧態依然のかたちを踏襲するままでよいのか。ある団体が名前を変えれば、変化が出るかもしれない。

また、目標3について、スポーツ実施率は60%ではなく、65%ではないか。

杉崎副部長 これは旧来のものなので、65%にしていく。

江島会長 指針策定時、スポーツ課は教育委員会であった。今は文化部であるが、小学校・中学校はどうか。

岡部委員 小学校の学校体育は基本楽しい体育がベースになっており、子ども達のアンケートを見ても体育が嫌いな子はほとんどいない。嫌いな子の実態に合わせて工夫をしている。運動好きなまま世の中へ出していきこうとしている。

スポーツをしていないという結果が出ているということは、どこかに境目が出てしまっているのだろうと考える。忙しいと答えた方はホームページも見ないだろう。何らかのかたちでつなぎをしないと広がっていかない。

鈴木副会長 大学としては、小学校で運動が好きな人と嫌いな人が選別されて進学してきているのではないかと思っていた。

岡部委員 そこを直す努力をしているのでかなり減少していると思う。

鈴木副会長 体育が嫌いだったという大学生がいれば、君こそ指導者としては大事だと、できない子どもの気持ちが分かるという逆の発想がないといけない。

江島会長 小田原市の小学校は楽しい体育で、中学校はどうか。

長峯委員 中学校も競技性を求めるものから、楽しい体育へとシフトしている。バレーボールのボール自体も扱いやすいボールで授業をしている。競技性を高めるためには部活動を行い、その部活動が二極化してきていると感じる。競技性を求める顧問と子どもの自主性に任せた顧問と分かれてきている。競技性を求める顧問からこぼれた子どもたちが運動を嫌いになっているのではないかという予測がつく。競技性を求めている顧問は楽しげにやるが、あまりにも競技性を求めすぎると不完全燃焼で終わってしまう。その部活動のバランスが難しい。

中学校自体は楽しい体育を行っており、体育嫌いはいないのではないか。運動会ではダンスをよく行い、皆ダンスが好きである。ダンスは今後の取り組みによいのではないか。

江島会長 子どもたちのスポーツ活動をとあるが、ここでも子どもたちが様々、スポーツ活動が様々である。子どもたちは小・中学校で運動が好きになると思うが、ではなぜ運動嫌いがいるのか分かりにくい。

加藤委員 結果として子どもの体力は落ちている。楽しい体育はよいかもしれないが、全国と比較して低い状況だがよいのか。バレーボールも基本が分からないと楽しくないのではないか。

川向委員 楽しいというのは自発的にやることである。楽しいというのは難しいスキルも簡単なものも全部含めて楽しいことになる。運動は易しいものが楽しくて、難し

いものが楽しくないわけではない。どんなものでも自分が真剣に取り組んだときが楽しいと思える。楽しいが基本で、上から押し付けるイメージで行うと運動が嫌いな子が出てくる。体育の先生はそこを工夫している。

加藤委員 現状を見ると、小学校・中学校のやり方がこれでいいとは思えない。

江島会長 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果をどう捉えるか。数字だけ見て落ちているからどうだということがなかなか言えない面もある。

概念を捉えることは難しいので、それぞれの方がそれぞれの立場で意見を言ってもらってよいものができると思っている。

鈴木副会長 もう一度自分たちの概念を整理しなければならない。

杉崎副部長 子どもの運動能力は、できる子とできない・やらない子の二極化が進んでおり、やらない子が増えている。やらない子をどうやって引っ張っていくかが課題である。

スポーツの概念は単純な話ではない。スポーツを身近に感じてもらうことが大切だと思っているので、そういったことを受けて案を作りたいと考えている。

江島会長 子どももひとくりにできない。忙し過ぎてそれ以上のことができない子どももたくさんいる。もう少し社会情勢みたいなものを分析していかないとなかなか難しいと思う。

指針を見直していくときに基本的なことからもう一度見直していくことが大事だと思う。

## 5 その他

江島会長 その他について、事務局から説明をお願いします。

嵯峨係長 今後の進行ですが、基本指針の見直しが来年度中となるので、来年度は審議会を3回ほど開催できればと考えています。

江島会長 皆様から何かありますでしょうか。小田原市民のスポーツ文化の定着に向けて基本指針が見直されていけばと考えています。

司 会 長時間にわたり御審議くださり、誠にありがとうございました。  
これをもちまして、平成27年度第2回小田原市スポーツ推進審議会を終了いたします。本日はありがとうございました。